

清原雪信の研究

- 伝記と伝説を中心に -

大平 有希野 (実践女子大学)

清原雪信(生没年不詳/1643-82?)は、江戸時代前期に活躍した女性画家である。本発表では、雪信について、新たにいくつかの資料を加え、従来の伝記を再考し新知見を提示するとともに、これまであまり論じられることのなかった雪信の伝説に注目し、伝記と伝説の両側面から改めて雪信という絵師を捉えなおしてみたい。また研究としては、江戸時代の狩野派の女性画家の中で、ひとり雪信のみが伝説化し高名になってゆく背景についても考え、江戸絵画史上における雪信の総合的理解を目指したい。

清原雪信の場合、同時代の女性画家の中では特に有名であり、その作品や伝記資料、さらには伝説の類などもかなり多く伝えられている。雪信に対する関心の高さは、生前からの人気に表れているといえるだろう。しかし、近世の女性画家としては比較的恵まれた研究素地を持ちながら、現在のところ雪信に関する本格的な論考はほとんどなく、よって雪信は未だ多くの問題を抱えた研究途上の絵師である。

現在ほぼ通説となっている雪信の伝記は、『古画備考』などの記載をもとに語られるものである。また伊藤梅宇の随筆『見聞談叢』に載る、駆け落ちの逸話も非常に有名なもので頻繁に言及されてきた。しかし、従来の伝記を見直せば、生没年すら確証がなく、雪信の生誕地、居住地の所在や、根本的なところでは清原姓の問題など不明な点が多い。また狩野家にまつわる出自とその家族との関係、あるいは駆け落ちの逸話の解釈についても問題視すべきである。

発表では、雪信の関係資料に対して行った調査と検証を踏まえながら考察を進める。発表者の見解としては、おそらく雪信は、父の久隅守景が襖絵制作などで関西方面に滞在中に同じ探幽門下の神足常庵の娘で探幽の姪に当たる国と結ばれ、その間に生まれた娘であり、神足家の本拠地が京都近郊の長岡付近であることから、京都にて養育され、その後も京都、大阪方面で活躍するようになったと考えられる。また清原姓については、従来多くの場合、雪信が清原氏に嫁したものと理解されてきた。それに対して、雪信の伝記資料としては新資料となる『神足家系』より、清原姓が母方の神足の本姓を意味していること、雪信本人が清原氏の出身である可能性を指摘する。また生没年については、関係資料を照合し、天和2年(1682)に没したという説を補強したい。

雪信の伝説については、17世紀末以降、井原西鶴の浮世草子『好色一代男』の中で「狩野の雪信」と言及されるのをはじめ、浄瑠璃、歌舞伎の演目にて雪信を連想させる「雪姫」が登場するようになり、女絵師像として雪信らしき女性が描写されている画像を載せた絵本類も出版されるようになる。このような展開は他にあまり例を見ず、雪信の特質として注目したい。江戸時代を通じて伝説化した雪信像が形成される過程は大変興味深く、伝説化されてゆく雪信についても明らかにしていきたい。